



農業に進むことを決意

西脇 佳代 さん
農業(江別市在住)

私は、江別市で両親と3人で水稲・小麦・大豆等を作っています。昨年就農し、後継者として主に野菜の収穫や草取り、ロータリー掛けなどをしています。一昨年までは青年海外協力隊員としてセネガルで活動しており、そこでの2年間が私を大きく変えました。

セネガルはサハラ砂漠のすぐ南に位置し、年間400mm程の雨しか降りません。そこでの私の活動は、砂漠化が進んでいる村にマンゴーやユーカリの木を植えることでした。

子どもの多い農村では、マンゴーは大切なおやつです。仕事のない女性でもマンゴーを街で売れば、貴重な現金を得ることができます。また、ユーカリの木は真っ直ぐなため建築用木材として常に需要がありました。しかし村人が木を植えたくても、知識も資材も足りません。そこで私が必要な資材を届け、村々に技術の共有ができるように橋渡し役となりました。また、水不足で苗を育てられない村に井戸を掘る支援も行いました。

連日40度を超す暑さの中、農民は黙々と農作業をしています。厳しい環境のセネガルと比較して、初めて日本の農地の豊かさに気がつきました。「耕したくても耕せない人々が日本の土地を

見たらいったいどう感じるのだろう」。そんなことを考えていました。セネガルの人々は決して豊かではありませんが、みんなが幸せを実感しながら暮らしていました。家族で農作業をし、夜は星空の下で語り合います。お金が無くても助け合い、物が無くてもあるもので工夫して暮らしています。「家族みんなが幸せなら幸せの総量が多くなる。その方が幸せだ」とセネガルが教えてくれました。

セネガルで自分の将来をじっくりと考えた結果、農地を大切に、家族と仕事ができる「農業」という道に進む決意をすることができました。これからは、セネガルで活動してきたように、人と人が繋がるきっかけを作れるような農業者に成長していきたいです。

青年海外協力隊 平成19年度2次隊派遣
職種:村落開発普及員
派遣国:セネガル



村の夫妻と

地域との交流

札幌国際センター・帯広国際センターから

札幌国際センター・帯広国際センター

北方圏センターが行う、JICAの国際センター(札幌市・帯広市)に滞在する研修員等が参加する様々な行事等をこのコラムに掲載します。

「新春文化塾」(札幌)

1月29日(土)、研修員たちによる若松と赤芽やなぎの春らしい生け花作品が飾られた札幌国際センター館内で、ひととき、なつかしい日本が出現した。



尺八と琴の演奏を聴く研修員のみなさん

滞在する研修員に日本のお正月の雰囲気味わい、昔遊びを楽しんでもらおうと毎年開催されている「新春文化塾」。この日の午前中、研修員はボランティアの皆さんによる初釜でのお点前(吉田迪子さんほか6名)に舌鼓を打ったほか、輪投げ、剣玉、竹とんぼ、だるま落としなどの昔遊びを体験し、ロビーではボランティアによる南京玉すだれ(小林マリさんほか2名)や尺八と琴の演奏(杉本史子さん、大瀧光悦さんほか史響会メンバー4名)を堪能。

また、午後、昼食会場では30kgもあるマグロの解体ショーやにぎり寿司の実演(寿司の家かっぱの職人さん2名)を満喫していた。

当日は各国から来ているJICA研修員やボランティアなど90名以上が参加し、中には法被にサムライの髪を被った人たちもいて和気あいあい「お正月」を楽しんでいた。



「そり滑り体験」(帯広)



1月23日(日)、帯広の森、ミニスキー場には、サモア、イラク、ベトナム、インド、ジャマイカ、タンザニアなどからのJICA研修員23名が集結した。この日の最低気温はマイナス7.7度。この冬1月の帯広では2番目に「高い」最低気温の日であった。

手袋の中には小カイロ、ほかにも足先用、体用カイロを身につけて午前10時からチューブやソリなどでなだらかな斜面を滑ったり、その場に居合わせた子どもたちと一緒に遊ぶ研修員もいて、土曜日の午後を自由に楽しんでいた。

イベントレポート

国際交流 in 積丹

天気にも恵まれた11月20日(土)~21日(日)の2日間、「国際交流 in 積丹」が開催された。積丹町での交流会は今年で10回目。北海道海外技術研修員や北大留学生など7カ国13名が参加し忘れたいひと時を過ごした。

初日は、松井積丹町長を表敬訪問。その後、この節目を祝しての記念行事を開催した。積丹町の小中学生や保護者を交えてゲームやクイズ大会、さらに積丹特産のかぼちゃを使った「かぼちゃだんご」やブラジルのお菓子「ブリガデイロ」を作る料理交流を行った。その日の締めくくりは「ダンス交流」。研修員・留学生は南米で流行した「マカレナ」を披露。その後、はっぴを着て「ソーラン節」を輪になって全員で踊り、会場は和やかな雰囲気にも包まれた。

翌日は町内の小中学校5校での学校訪問。子ども

たちはクラスに研修生や留学生を迎える準備を何週間も前から始め、この日を楽しみにしていた様子が表情にあらわれていた。研修員・留学生も、小・中学生にわかりやすいように写真や動画を駆使した母国紹介のプレゼンを行った。その後も、外国語の挨拶の練習や遊び、学校によっては餅つきや工作をするなど、互いに楽しいひと時を過ごした。子どもたちはこの日の交流を通じて世界を身近に感じ、さらに外国人参加者も積丹町の子どもたちを通じてどさん子の温かな心に触られたのかもしれない。

2001年9月にスタートしてからまる10年。積丹町、町教育委員会、学校関係者、地域の方々の理解があって続いてきたこの事業。当センターも長年関わる中、子どもたちが物怖じせず研修員・留学生を迎え入れる姿を目の当たりにし、事業の成果を実感している。研修員・留学生にとっても積丹での思い出がいっつも心に残るのであろう。心と心が結ぶ積丹町と世界の絆がさらに深まり続くよう願っている。



10周年おめでとう



子ども達の盛大な見送りを受けて

た12月中旬のことで、今頃はどこかで滑っているかも)。

韓国の学生はアルバイトをしていません

留学して一番驚いたのは日本の学生がアルバイトに熱心なことで、ソウル大学の学生は家庭教師以外はほとんどしないという。朴さんは大学のサークルに参加して、週2回仲間達とアコースティックギターの演奏を楽しんでいる。今回も帰り際に押尾コータローの「トワイライト」をつま弾いてくれた。

「国際交流 in 積丹」に参加

積丹町(教育委員会など)と北方圏センターが行っている交流事業に参加して余別小学校(児童数6名)を訪問した。「韓国ってどんな国?」などの説明を最初は普通



に聞いていた子ども達がキムチやチゲ鍋など韓国の美味しい話になった途端、「表情が変わって盛り上がったのが可愛らしかった」という朴さん。ご自身もサンマなどの北海道の新鮮な魚を絶賛していた。

もう一度、北海道に来たいと思いましたが

たつぽろ 留学生日記

朴 晟鎮さん (大韓民国・ソウル市出身)

「もう一度来たい」と思った北海道 自然が豊かな北海道に住んでみたい...

韓国のソウル大学と北海道大学との交換留学で昨年10月初めに来道し、文学部4年に在籍して、日本史を学んでいる。「ソウル大学では西洋史を専攻していますが、日本に来たのだから日本史を勉強することにしました」。日本語能力試験1級に合格していて日本語は堪能。「実は、大学1年の冬休みに北海道を旅行しました。函館、小樽、網走、釧路まで独り旅をして、その時に北海道の自然の雄大さに感動して、もう一度来て、ここに住んでみたいと思いました」。今は北海道に来たからにはスキーも体験してみたいと話していた(まだ雪が少なかつ

ソ連(当時)の貨客船「インディギルガ号」が猿払村沖合いで浅瀬に乗り上げて横転したのは、1939年(昭和14年)の12月のことであった。1,100人の乗客乗員のうち702人が死亡する遭難事故になった。この時猿払の人々は村をあげて遭難者430人を救助した。

隣の家とは仲良くし、助け合う

時代は東西冷戦のさなかであったが、村では慰霊碑を建立して毎年遭難者慰霊祭を行っていた。それが端緒になって両村は1990年(平成2年)友好姉妹村提携を結び水産加工研修生の受け入れなど経済交流事業につながった。同時に学童交流事業を進め、2004年(平成16年)まで累計754名の中学生がオジョールスキイ村を訪問するなど友好関係が続いていたが、2004年、両村の経済事情もあって定期的な交流は途絶した。

2009年、ひとつの新聞記事が交流再開へ

現在、稚内市で中学校教師をしている松井くるみさんは、中学3年の時に村の学童交流に参加してオジョールスキイ村を訪れた。その時に受けた温かいおもてなしに感動してロシア(旧ソ連)への想いを深めた松井さんは、村の交流に役立てたいとその後大学でロシア語を専攻、ロシアの大学への留学も果たした。



松井くるみさん

留学中に受けた取材の中で、故郷の村のオジョールスキイ村との交流を「夢をくれた」と語ったことが両村の人材育成のためにも交流再開という気運を生み、両村は協議の結果、本年児童、生徒の交流を中心にした交流の再開を決めた。



オジョールスキイ村代表団来村

猿払村の総務課長補佐眞野智章さんは、「年月はかかりますが、国際交流事業は人材を育成します」と語り、今、中学生を前に日々教壇に立つ松井さんは両村の交流を振り返って「いつか再開したらいいな、とずっと思っていた交流が再び始まることをとても嬉しく感じます。たくさんの子供たちが温かいオジョールスキイ村の人々と接し、異文化を肌で感じることで、広い目で物事を捉えられるようになる良いきっかけになればと思います」と、交流を経験した子供たちが中心となって、これからの交流が末永く続くことを願っている。



取材を受けた記事 (二〇〇九年一月十一日 北海道新聞)

ジンバブエの民俗音楽グループ「ジャナグル・ジュニア」夏に来道、公演

ジンバブエのアートセンターで伝統音楽と踊りを学ぶ子ども達のグループ「ジャナグル・ジュニア」が今年も北海道にやってきて、各地で公演する。主催者は公演する会場などを募集している。詳細は実行委員会の吉岡さんまで(小樽ローズ幼稚園 TEL 0134-22-1406)。「であい」Vol.58に記事掲載。



交流再開

「交流に夢をもらった」、当時の中学生の想い

72年前、当時のソ連貨客船の遭難事故に遡る両村の交流

猿払村、サハリン州・オジョールスキイ村との